

月刊「キリスト教書評誌」

本のひろば

ISSN 0286-7001

一般財団法人キリスト教文書センター
1957年7月17日第三種郵便物認可
2019年1月1日発行(毎月一回発行)第736号

April
2019 4

● 出会い・本・人

聖書本文を読む大切さ 鈴木佳秀

● 特集「十字架の贖罪」を学び直すには

この三冊! 森島 豊

● 本・批評と紹介

キリスト教史学会編

マックス・ヴェーバー「倫理」論文を読み解く 阿久戸光晴

関西学院大学神学部編 高齢社会と教会 山本 誠

江口再起著 ルターの脱構築 宮本 新

小川 修著 小川修パウロ書簡講義録10 竹田純郎

エルシー・アン・マツキー著/南 純監訳、小林宏和、石引正志訳

カタリナ・シュツツ・シエル 芳賀 力

月本昭男著 詩篇の思想と信仰VI 日原広志

東京神学大学神学会編 新キリスト教組織神学事典 渡邊義彦

平野克己編 聞き書き 加藤常昭 深田未来生

稲垣久和編 神の国と世界の回復 寺園喜基

佐藤司郎、吉田 新編 福音とは何か 芦名定道

既刊案内

書店案内

続べるもの／叛くもの

新教出版社編集部編

統治とキリスト教の異同をめぐって

佐々木裕子・堀江有里・栗友紀子・白石嘉治・栗原康・五井健太郎・ジェンダー、セクシュアリティ、アナキー等を手がかりに。

◆四六判・本体2200円

今を生きる滝沢克己

滝沢克己協会編

生誕110周年記念論集



独自のインマヌエル思想を唱えその影響が国内はもとより海外にも及んだ「滝沢神学」の射程を、最首悟氏、稲垣久和氏をはじめ16名の論者が多方面から論究。

◆四六判・本体3200円

デイズニーランド研究

宮平望 (西南学院大学文学部教授)

世俗化された天国への巡礼

デイズニーその人の生い立ち、キャリア、信仰・思想から、そのテーマパークの構造と機能、宗教性に到るまでを解明。

◆A5判・本体2000円

旧約聖書入門3

大野恵正

現代に語りかける出エジプトと契約

聖書を格調高く語ることに定評ある著者が、旧約聖書の豊かなメッセージを現代人に取り次ぐ。本巻は難解な律法を扱う。

◆小B6判・本体1900円

旧約聖書入門1

現代に語りかける原初の物語

◆本体1800円

旧約聖書入門2

現代に語りかける父祖たちの物語

◆本体1900円

▶ 2019年春の聖書科新作教科書 CSや求道者会にも

希望する力

生き方を問う聖書

佐原光児 (明治学院高校教諭)

◆A5判・本体1300円

虚無や諦めを乗り越える「希望する力」。本書は、その力を鍛える一助となるために書かれた。若者や教師たちにぜひ勧めたい一冊。



新たな約束

新約聖書に学ぶ神の約束

後藤田典子 (金城学院中学校教諭)

◆A5判・本体900円

長年教鞭をとってきた著者の経験を生かした新約入門。単なる知識の教授にとどまらず、新たな価値観に基づく生き方を共に考える。





出会い・本・人

聖書本文を読む大切さ

鈴木佳秀

筆者の恩師である故関根正雄先生が、大学院の演習で、繰り返し言われていたことがある。最近の研究者は、まず注解書や研究論文を読んでから、最後に聖書本文に当たるという傾向が強いが、それは間違っている。まず、聖書本文を原典で読み、それを翻訳してから、改めて注解書なり研究論文に目を通すことが大切で、それを忘れないように、と教え諭しておられた。

岩波書店による聖書翻訳の企画で『ヨシユア記・士師記』一九九八年、『民数記・申命記』（分担訳で申命記を担当）二〇〇一年、『十二小預言書』一九九九年を刊行できたことも、恩師の教えを守って仕事をしたお陰である。

また今回、出エジプト記の注解書を執筆する際に、聖書本文の翻訳から作業を始めたが、恩師の教えの通り、次々に新しい発見があり、翻訳に苦勞を強いられた部分もあったが、充実した仕事になった（VTJ『出エジプト記』上・下巻二〇一八―一九九年、日本キリスト教団出版局）。それは決して、それまで学んできたこと、長い年月をかけて積み重ねられてきた研究史や、幾多の注解書を無視したという意味ではない。

思えば、申命記には、謎と言うべき文体様式があるとされてい

た。それは、モーセがイスラエルの民に語る言葉に、二人称単数形によるものと二人称複数形によるものが混じり合い、一つの文章の中に両方が混在している現象が多数見られるという謎である。留学先で、その謎解きをする際も、研究史的な前提をあまり強く想定せず、聖書本文での書かれようを最優先させたことを思い出す。注解書の多くは、その謎を無視するか、多くは謎に沈黙していたからである。古い注解書には、文体の異なる別々の版が存在していたのを、後代に編纂したとしか説明されていないのを感じ出す。だがその編纂の理由も、具体的な歴史的背景も触れられていなかったからである。

そこで、恩師の教えに従い、写経するかのようになり、原典の書き写しを始めたのである。書き写ししながら翻訳するその作業の中で、謎解きのヒントが与えられたことは、生涯忘れられない思い出である（『申命記の文献学的研究』一九八七年、日本基督教団出版局、『ヘブライズム法思想の源流』二〇〇五年、創文社）。その際も、またその後も、繰り返し、恩師の貴重な教えに導かれてきた。今は、ただただ感謝するばかりである。

（すずき・よしひで＝フェリス女学院学院長）

「十字架の贖罪」を学び直すには ▼この三冊！

森島 豊

(もりしま・ゆたか・青山学院大学総合文化政策学部准教授)

イエス・キリストの十字架による罪の贖いは、まず説教され、多くの人間

を新しく生まれ変わらせ、教会を生み出してきました。その伝道力をもう一度日本の教会に取り戻すために、三つの点に注目してお勧めする書物を選びました。①十字架の贖罪を説教したいと思わせてくれるもの。②聖書的根拠を明確に示してくれるもの。③その信仰に確信を与える神学的考察をしているもの。そこで、現在手に入る書物の中から以下の三つの書物を紹介します。

加藤常昭編『わが神、わが神——受難と復活の説教』

十字架の贖罪は、学問的な研究対象である前に、説教されてきました。説教と結びつかない贖罪論は教会も信仰者も生かすことができません。この書物は、日本の教会の先輩たちがキリストの十字架による罪の贖いをどのように語ってきたのかを教えてください。

この書物を一言で表すと、安心して、期待して、最後まで読める説教集です。どの説教も魂に衝撃を与え、これから

の日本の教会に必要な、先輩たちが残してくれた遺産です。

説教と解説を合わせて読むと、どの説教者にも福音を伝える情熱があり、伝えるための神学的思索の努力があり、福音を語る言葉を体得していることがわかります。もしかすると、現代の説教者の多くがこの三つを失っているのかもしれない。これらの先達の説教者が自分の語る言葉を獲得した背後には、聖書が証しする福音によって救われた体験があるのだと感じさせられます。植村環の次の言葉が響きます。「教会の使命はキリストの救いを宣言することである。キリストが罪の赦しを与えたもうことを、ほんとに私どもの身に体得してこれを告白すること、これを発表することである。自分の身に体得しないで、どうしてそれを告白することができましょう。私どもの宣教が弱い

は、私ども自身が主イエス・キリストが私どもにたもつたところの罪の赦しについての体験がうすいからです。私どもはほんとうに罪が赦されたということを感じているのでありますか」(一三九—一四〇頁)。

先輩たちの伝道者としての生涯は、決して安定したものではなく、紆余曲折しています。けれども、一人一人は努力の塊のような学びと伝道の取り組みをされました。そうさせるだけの恩寵の体験があったからです。その存在が語る言葉が、また多くのキリスト者と教会を生み出しました。実にたくさん教会を短い期間に開拓された報告を聞き、驚きました。それだけ福音の言葉が確実に届いていたし、何よりも勢いがあったのです。

思っていた以上に力強い説教をしていて、驚かされる説教者もいました。日本の神学者・説教者について、私た

ちは政治的な評価から偏った見方をし、実際にその説教を聞かなくなっている説教者がいることを反省させられます。歴史的评价が難しい人でも、食わず嫌いにならずに、実際にどんな説教を語っていたのかを聞かなくてはなりません。戦争中の教団の指導者や、教団紛争中のことでも、そこでどのような戦いをしていたのかを、説教を通して聴くことの重要性を教えてください。一書です。

ペーター・シュトウールマツハー『ナザレのイエスと信仰のキリスト』

原著は一九八八年に書かれた古いものですが、聖書の言葉に基づいてキリストの十字架による贖罪の根拠を示している点で有益な書物です。著者が問題としているのは、教会の信仰の精髓となる贖罪信仰を、原始キリスト教会による解釈の産物と考える新約聖書学の傾向です。この考え方が現在も日本

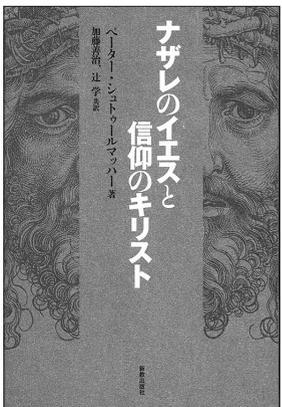
の新約聖書学者によって主張されていることは「訳者あとがき」によく表れています。著者はそれに対して、「イエスの歴史と人格こそが……人々の信仰生活を形作る力」(一四六頁)であったとし、「イエスと共にある神の歴史は、キリスト教信仰に先立って与えられていたものである。その神の歴史がこの信仰をもたらし、規定しているのであって、神の歴史が信仰によって初めて作り出されたのではない」(一六六頁)という立場を貫いています。

著者はこの根拠をイエスのメシアとしての自己認識に求めます。「地上のイエスが、自分こそ神からイスラエルに派遣されたメシアとしての『人の子』であるという主張をしたということを見て取り、認めなければ、イエスの働きも受難物語も史的に理解できない」(一六頁)。十字架による贖罪がイエス自身の自己理解によることは、新約聖



日本の説教者たちの言葉
『わが神、わが神』
受難と復活の説教
加藤常昭：編
日本キリスト教団出版局
2018年刊
四六判並製260頁
2500円（税別）

教会が証してきた信仰内容を確認しながら現代の問題に取り組み本書は、安心して読むことができ、今日的課題に取り組み教会の姿勢を教えてください。さらに、教会のアイデンティティと日本のプロテスタント教会が贖罪論において一致していることを再確認さ



『ナザレのイエスと
信仰のキリスト』
P.シュトゥールマッハー：著
加藤善治・辻学：訳
新教出版社
2005年刊
四六判並製204頁
1900円（税別）

せてくれます(二二三頁参照)。しかも、贖罪論がキリスト教において重要な位置を持つことを、神学的にはキリスト論と三位一体論との関係からみれば、教会的には伝道との関係から離れず、地球の危機に関しては万物の救済を視野に入れて示している点で、非常に優



『贖罪論とその周辺』
組織神学の根本問題2
近藤勝彦：著
教文館
2014年刊
A5判上製371頁
5500円（税別）

れた神学的考察を提供しています。贖罪論史の理解と神学的な課題、教会のサクラメントとの関係など、教会に必要な神学に取り組み本書は、これから日本で神学を志す者に一つの道しるべを示してくれるでしょう。

書を旧約聖書から分離しないことでもわかります。「旧約聖書の啓示の証言こそが、イエスの宣教からイエスへの信仰に至る道程を歴史的かつ聖書的に理解するために私たちが見なければならぬ決定的な方向を指し示している」(二八頁)。この視点からイエスの言葉と行為における神の働きに注目し、メシアとしてのイエスが「復活前のイエス伝承に由来するものであり、イエス自身が肯定し、用いたものである」(五一頁)ことを説得力ある仕方です(五九頁)。

シントウールマッハーは聖書にある難解な諸問題も無視していません。たとえば、四つの福音書の中で最後の晩餐と十字架にかかる時が異なることや、イエスがなぜ死ななければならなかつ

たのかという根本的な問いとも向き合っています。これらの問いに対して、聖書に基づき、教会の信仰を建て上げる神学をしている点で、この書物は教会の説教者と信仰者の確信を支える良書です。

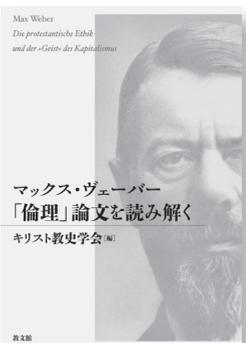
近藤勝彦『贖罪論とその周辺』

贖罪論に関する様々な神学的書物がありますが、日本の教会とそこに生きる信仰者に力を与える神学的考察を考えた時、近藤勝彦氏の書物がお勧めできます。この書物を通して歴史的に著名な神学者の贖罪論を知るだけでなく、それらの神学の課題も理解できます。特に魅力的なことは、日本のプロテスタント教会の形成を射程に入れていることです。海外の優れた神学的考察が、日本の教会と信仰にそのまま役立つとは限りません。日本の教会には、世界的な神学的功績を日本の教会と信仰者の力にする神学が求められています。

その期待と課題に込えてきています。「二十世紀半ば以降、世界の神学的潮流において『贖罪論』に対する関心はかならずしも中心的な位置を占めているとは言えなくなってきた」(二二頁)。この傾向に対して次のように言います。「教会とキリスト者のアイデンティティを確認する際にも、伝道の拠点を明確にして、現代人に対する福音を鮮明にする際にも、このキリストの出来事における神の救済行為に対する信仰と認識とを深くすること、贖罪論を掘り下げて展開することが、決定的に重要となる」(三三四頁)。この問題意識のもと、「イエスの言葉と行為に歴史的起源を持ち、復活者との出会いの経験に基づいて証言された『使徒的証言』に従って、イエス・キリストの出来事とその意味を神の救いの出来事として認識する」(二二頁)ことを軸に贖罪論の考察を展開します。

各教派トッピクラスの研究者に よる「テーゼ」の徹底検証

〈評者〉阿久戸光晴



マックス・ヴェーバー
「倫理」論文を読み解く
キリスト教史学会編

マックス・ヴェーバー
『倫理』論文を読み解く
キリスト教史学会編

本書は、キリスト教史学会が二〇一七年九月一五日に聖心女子大において「ヴェーバー『倫理』論文とキリスト教史学」と題しヴェーバーの専門家とプロテスタント各教派トッピクラスの研究者が行った発題を編集したものであり、貴重な出版と敬服する。

わが国の教会、学界、実業界で影響力を誇ってきたマックス・ヴェーバーによる一九二〇年の論文「プロテスタントイズムの倫理と資本主義の精神」は大塚久雄氏らの訳により愛読されてきた。同論文は、大西晴樹氏が的確にまとめられたように「西洋近代の『資本主義の精神』の独自の起源がプロテスタントの禁欲倫理にある」との「ヴェーバー・テーゼ」を提示している。しかし近年主にヴェーバーの論拠資料の扱いを巡って欧米を中心に同テーゼへの重大な疑問符が付けられてきた。わが国でも椎名重明氏と羽入

辰郎氏が文献学の観点から相当厳しい批判を展開し、特に羽入氏はヴェーバーを「知の犯罪人」とまで呼ばわり相当波紋を呼んだ。こうした中で同学会がこの議論を取り上げ、また各教派の最新研究の視点からこの「テーゼ」の妥当性を検証した第六八回大会シンポジウムを開催した意義は大きい。さて書物としての本書を検討する。

大西晴樹理事長は序章で「キリスト教史学会はなぜヴェーバー『倫理』論文を取り上げるか」を述べ、問題意識を明らかにしている。すなわち氏はヴェーバー『倫理』論文への近年の批判を意識し、一九〇四―五年の原論文と一九二〇年に大改訂をして発表された同論文の二つのヴェーバー自身の問題意識の微妙な相違を取り上げ、前者の資本主義の精神の起源としてのプロテスタントイズムを究明する世界観の問題意識から批判を受け、後者の資本主義分修正と最後の山本氏の厳しい「テーゼ」批判とは細目において火花が散ると思われるが、その判定は読者に委ねられている。

義の精神が社会の近代化に及ぼした証明の対応に追いつけなかったことを示唆する。端的に論文名の『と』の前半と後半の強調点の変遷である。さらに社会の近代化を生み出したのは禁欲的プロテスタントイズムなのか、資本主義の動機諸力たりうる一般精神なのかということになり、ヴェーバーの論証がやや粗いということになると「テーゼ」自体が崩れかねない。続いてルター・ピューリタニズム・ドイツ敬虔派・メソジスト派・バプテスト派と『倫理』論文との関連が今日的視点から検討されている。各教派の第一人者が担当しており力のこもった論が展開されている。共通して言えるのは、ヴェーバーが依拠した資料の時代的制約を指摘して「テーゼ」の部分修正をしようとして各教派の教義に基づく勤労倫理が提示されている。

最後に山本通氏が全体コメントと「テーゼ」の再検討を行っている。氏は羽入氏以上にヴェーバーの論証過程を批判し、さらに貨幣獲得に努力する資本主義の精神はその社会経済システムから生み出されたものとし、結論として「テーゼ」を今日支持しえないことを表明する。

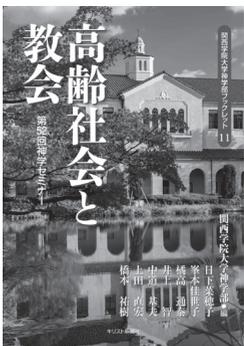
本書において大西氏をはじめとする諸氏の「テーゼ」の部

から薦めたい。

（あくど・みつはる 福岡女学院大学学長）
（A5判・二〇四頁・本体二〇〇〇円＋税・教文館）

高齢社会の中で、 教会が語るべき福音

〈評者〉**山本 誠**



関西学院大学神学部ブックレット
高齢社会と教会
第52回神学セミナー
関西学院大学神学部編

評者は、牧師ではなく、神学者でもない。福祉の仕事はしているものの、現在は高齢者関係の施設で働いているわけでもない。そんな私が書評をさせていただいてよいのかという戸惑いを持ちつつも、関西学院大学神学部において『ディアコニア・プログラム』が始まろうとしていた数年前のことを思い出す。

当時、大学にほど近いところで高齢者施設の園長をし、関西学院大学神学部の神学セミナーでも、福祉の視点より『ディアコニア（共に歩み、「仕える人」となるために）』を考える一人として関わらせていただいた。授業も担当し、受講生には施設を訪問いただいた。高齢社会は、決して先のことではなく、いま目の前で起きていることである。介護を必要として施設で暮らす高齢者がおり、また教会の礼拝出席者の多くが高齢者といわれる年代の人たちである。

セスフル・エイジング論（現実的な活動能力）から、精神的な豊かさへ価値をシフトさせる次の世界として、ワンダフル・エイジングを提唱したいとしているのが印象的である。人は自分の人生に責任を持ちたいと思うし、より良い生活を選択・実現したいと思う。自らの生き方だからこそ自ら全てをコントロールしたいと思うのである。しかし、高齢によりそれが難しくなることは少なくない。高齢者施設で生活する多くの人たちは、それを認めざるを得ないという現実を突きつけられる。だが、このワンダフルには新しい出来事との遭遇にときめく驚き（ワンダー）に満ちているという意味があるという。「福祉の現場（高齢者施設）には、ときめくような驚きの提供があるのか」。この問いをそのまま教会に置き換えてよいのかもしれない。教会において、高齢者といわれる人たちがときめき驚くような御言葉が語られているのか。

神学が、そして牧師・神学生が、教会やそこに集う一人ひとりが、どのように社会の課題・現実に向き合うのか。

このブックレットは、以下のような構成になっている。

主題講演「人生二〇〇年時代の生きがい追求」（日下菜穂子）

現場報告「地域で見守り・支えあう——つどい場活動」

（峯本佳世子・橋高通泰）

ワークショップ「教会の取り組みの現実と要望」（井上智）

神学講演「高齢者と教会——なにが共生を阻むのか」

（中道基夫）

現場報告「病院と老健チャプレンの働きから気づかされること」（上田直宏）

閉会礼拝（橋本祐樹）

特に主題講演の中にある一九八〇年代に提唱されたサク

今回のテーマ『高齢者と教会』を改めて考えさせられる。神学部長の中道氏は、「単なる、高齢者サービスに関するノウハウの問題ではなく、高齢社会の中で教会は語るべき福音を持つており、それをもう一度現代に通じる言葉で語る必要があります」と神学講演を締め括っている。高齢社会を担うのは誰か。誰かがやってくれるということでは決していない。私がある一人であるという自覚を持ちつつ、私の教会や地域をいま一度見渡してみたい。ワンダーに満ちた御言葉が語られる教会、ワンダーに満ちた実感を持つような生活こそが求められているのである。

ワンダーをのぞきに、ぜひブックレットの現場報告、

ワークショップ、神学講演を読み進めていただきたい。

（やまもと・まこと）聖隷福祉事業団 在宅・福祉サービス事業部

浜松学園開設準備室副室長）

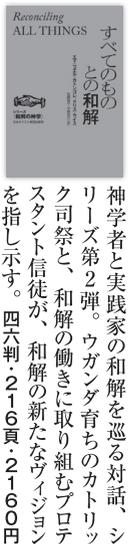
（A5判・一〇二頁・本体一五〇〇円＋税・キリスト新聞社）

シリーズ和解の神学（第2回配本）

すべてのものとの和解

E・カトンゴレ／C・ライス 佐藤容子／平野克己 訳

2019年
3月11日
刊行予定



神学者と実践家の和解を巡る対話、シリーズ第2弾。ウガンダ育ちのカトリック司祭と、和解の働きに取り組みプロジェクト信徒が、和解の新たなヴィジョンを指し示す。四六判 216頁・2160円

増補改訂版 旧約文書の成立背景を問う

共存を求めるユダヤ共同体 魯恩碩



2019年
3月1日
刊行予定

試練と苦難を経て旧約聖書を生んだ、捕囚後ユダヤ共同体。その実態や諸文書の成立した時代的・社会的背景を問うた力作を増補改訂。A5判・418頁・4536円

日本キリスト教団出版局
〒169-0051 東京都新宿区西早稲田2-3-18
☎03-3204-0422 ☎03-3204-0457
E-mail eigyou@bp.ucci.or.jp 《価格8%税込》
<http://bp-uccj.jp>

現代社会とルター神学

〈評者〉宮本 新



ルターの脱構築

宗教改革500年とポスト近代

江口再起著

ルターには「越える」ものがある——。本書の観点である。しばしば、ルターは古典的テキストとその歴史が研究され、宗教改革者ルターとして扱われる。プロテスタントのルターや、ルーテル教会(ルター派)のルターとしてとらえられもきた。しかしそこにおさまらないルターもある。人類の課題に接触するルターである。

著者は日本福音ルーテル教会で牧会し、現在はルーテル学院大学・神学校教授。その間に東京女子大学で長らく教えていたが、一貫しているのはルターへの注視である。ルター神学の核心には「信仰義認」がある。しかしそれを「信じる」ことよって義とされる」と言うのでは言い尽くせないどころか、核心から離れてしまう。人の信仰ではなく神の恵みへの注視として、「恩寵義認」が提案される。信仰義認か恩寵義認か。本書を手に取ると、言葉の言い換えの問

い神の時間との二重性で考え抜かれている。この二重性(または同時性)こそがルターから学び、ルターをも乗り越える神学の深みであり凄みにあたる。この深みと凄みが失われるところ、言葉は平板となり(単純化)、よどむ(複雑化)。「脱構築」とはデリダの言葉としてやや浸透しすぎた感もある。著者によれば、否。デリダからハイデガー、そしてルターへ！そして真相はルターからハイデガー、そしてデリダへと結ばれるものがある。解体、即、構築のロジックだ。

そこであらためて、現代世界とルター。ここにはどんな関わりと意味があるのだろうか。テーマは論争的。しかし本書の文体と論述は穏やかで説得的である。そしてもうひとつ特色がある。しばしばルターを乗り越えるというとき、ルターの良い面も悪い面も見えて、特に悪い面を指摘し学び直すと考えられる。それは当然のことながら、本書の方向はさらに徹底化する。長所と思われるところこそ、「解体構築」することを意図している。「信仰義認、聖書の権威、万人祭司等、金字塔とも言える彼の神学思想そのもの」を「乗り越える」ことこそが未来となる。ルターの神学そのものに内包されている徹底性であり、その意味でルター神

題ではないことに気が付く。福音の脱構築的理解。それがルターの宗教改革の核心にあり、リフォーメーション(再形成)の意とするとところとなる。

本書には重要な二つの日付がある。500と3・11。二〇一七年に迎えた宗教改革500年のことであり、3・11とは二〇一一年三月十一日の東日本大震災、とりわけ「フクシマの時代」が著者の関心にある。ルターとフクシマ両者とその日付は本来別々のものでありながら、同時に別々のものとなっていない。なぜそのようなことが起こるのか。「神が創造されたすばらしき世界」に住まう私たち。ここから見れば、ルターもフクシマも過去・現在・未来にかかわる事柄であり、信仰において、この日付はばらばらのものとならない。

500と3・11という人間の時は、創造・救済・終末と学でありつづけ、また宗教「改革」の主眼がどこに向けられていたかを思わせる。信仰・聖書・教会を解体、即、構築した先達がいる。P・テイリッヒ、滝沢克己、D・ボンヘッファーという三名が挙げられているのも大変興味深い論考になっている。

こうした「脱構築」の果てに何があるのだろうか。江口氏の論点は明瞭である。

ecumenism・ecology・economyの「三つのE」が課題であり同時に未来となる。「生きる」とは住む(希語・オイケーオー)「ことであり、この生きる＝住むことの危機は、人間の問題であり、神の問題でもある。人は神が造られたすばらしき世界を生き住まうものであるからだ。ここでエキュメニズムとは、教会同士が親しくなるという内なる問題で収束しない。むしろ神が造られたすばらしきこの世界に人と人が「神の前で、神と共に、神なしに」(ボンヘッファー)いかに住まうものとなるか。これは「エキュメニズム最大の課題」であると同時に、人類の課題に挑むことが示唆されている。

(みやもと・あらた)ルーテル学院大学・神学校講師

(四六判・二二二頁・本体一五〇〇円+税・リトン)

人基一体の代理的贖罪論

〈評者〉竹田純郎

後期論文集



小川修パウロ書簡講義録 10

後期論文集

小川 修著

本書は、小川がブルトマンとバルトの影響を受けて彼独自の聖書解釈と、一遍の仏教への深い洞察とを公表したものである。それは読者を良い意味で挑発する、彼の浩瀚で強靱な思索を表わしている。では、なにが挑発的であるのか。

小川は、宗教言語に潜む人間中心主義を看破する。例えばニュートンの発見が近代の新しい世界理解を産んだように、そもそも世界観は人間とその言語の産物であり、それゆえ人間の言語能力の限界と、その域外に対する無力を露呈する。宗教言語もその例に漏れない。

小川は、学生時代に学んだギリシア哲学者、井上忠にならって、人間の宗教言語で処理できない出来事をあえてギリシア出自の運命(モイラ)となづける。運命は、人間の我欲を根底から覆す恐るべきものである以上、洋の東西を

問わず、誰をも襲う死の現実を含意している。だが小川は運命を、新たな命を運ぶものとして、命運と言ひ換える。こうして死生は、いわば闇と光という両面を具えた全宇宙的な事態と解される。

小川は、キリストの出来事こそその全宇宙的な事態だという。それは史的な一度きりの出来事ではなく、現在の私たちの身にも生じている運命の出来事である。キリストの十字架上での絶叫は出来事の否定的側面だが、それに留まらずに肯定へと脈動する。キリストの出来事(「こと」とは、古い人間が死に、新しい人間が誕生するという、キリストの十字架即復活を意味し、それが神の義と称されるものに他ならない。

小川は、パウロが「ロマ書」で展開した「ピステイス・イエス・クリストゥ」という聖句を、「イエス・キリストへの信仰」と訳さずに、「イエス・キリストのまこと」と訳すことによって、神の義を論ずる。すなわち、人間が神の前で義とされるのは、人間の信仰によるよりも、むしろ「イエス・キリストのまこと」によってである。なによりも神の恩寵が人間の救いであるわけである。そして、その義とされる「こと」の裡で、その「こと」に基づいて、この「こと」から、人間に起こる「こと」の自覚と認識が信仰である。要するに、人間の信仰によって義が生ずると解するような義認論が否定される。

小川は、パウロ書簡を参照して、「こと」の成る場をからだと解する。文字通り、身体または生命である。例えば、日本語で「彼は学問に身をささげた」と語る場合の身のこと、つまり身体的存在者である人間のことである。人間は、死ぬべきからだとして、まさに死に裏打ちされた現場であるし、それゆえ人間のからだはキリストの住まいである。つまるところ、「キリストのまこと」が成るとは「からだ」の甦りを意味する。とは言っても、その甦りとは、小川のパウロ理解では、死後復活や靈魂不滅では決してない。それどころか、古い人間の死と、新しい人間の誕生とは、私という人間が「キリストのまこと」によって生かされている以上、キリストが私のうちで生きていることであ

る。このように私が主語として存続しながら、キリストが私の生の主体(従って私の認識の主体)へと転換することによって、キリストのうちにある私が(キリスト主体)を自覚し信じることになる。私たち人間からすれば、十字架即復活の「こと」が絶対的に決定されているという受動的態を、私たちが能動的に自覚するのである。それが、受動的能動態の様相をおびた「代理的贖罪(satisfactio vicaria)」である。

代理的贖罪やキリスト主体の成就を、小川は人基一体または人基相入となづける。それが成就する場合、私がキリストの真正正銘の媒体たりえて、小川が洞察した一遍のように、「念仏が念仏を申す」という同語反復を是とすることができ。がしかし、弱い生身の私は、その「こと」の成就の約束を信じて、祈り続ける以外に術があるだろうか。このような同語反復に到る途を辿ることは、キリスト教神学に限定されるべきものではなく、現代における宗教の思想的課題だと言えよう。小川が次世代の人間に託した課題はこれである。

(たけだ・すみお 金城学院大学名誉教授)

(A5判・四四六頁・本体三〇〇円+税・リットン)

宗教改革を支えた 「教会の母」

〈評者〉**芳賀 力**



カタリナ・シュッツ・シエル
16世紀の改革者の生涯と思想
エルシー・アン・マツキー著
南 純監訳、小林宏和／石引正志訳

不思議な感覚を味わった。場所はストラスブル。まるで五百年前、ノートルダム大聖堂脇の曲がりくねった路地裏の石畳を歩いているような気がした。著者がスポットライトを当てるのは、ストラスブルの宗教改革期を生きたカタリナ・シュッツ・ツエルという一女性である。男性に比べ女性たちの声が伝えられることの少ない歴史の表舞台から一歩路地裏に入って、本書は宗教改革の原像に迫ろうとする。

カタリナは中世後期のカトリック的敬虔の中に生きていた。当時の人々は度重なる疫病の猛威にさらされ、死の危機に怯えていた。聖人を頼みとする信心が横行し、死者の魂を煉獄から救うために免罪符が飛ぶように売れた。しかし彼女の不安はぬぐえない。当時出回り始めた聖書を彼女はむさぼり読んだ。ラテン語聖書からの独訳、ルター訳、

チューリッヒ訳があった。一五一八年、二十歳を迎えたカタリナは、ルター出版するパンフレットを読書の内に加えた。それは「荒れ果てた森の中で道に迷い行き暮れていた者に起こった」(四一五頁) 恵みの経験だった。そしてそこに、福音主義的信仰に立つマテウス・ツエルが牧師として赴任してくる。ツエルの説教は彼女を福音の自由へと解き放った。キリストの義だけが救いをもたらす。彼女はさらに多くのことをツエルに問い、学び、語り合った。マテウスとカタリナは結婚し、新教牧師の家庭を築くことで夫婦と家庭のあり方の範を示した。それは新しい信仰に生きる共通の使命によって結ばれたもので、「女性の新しい召命である『牧師の妻』のストラスブル版を作ること」(八〇頁) となった。教会員は「学識ある牧師のもとではなく、むしろ彼女に相談したであろうし、彼女は彼らの

『福音』を聞く妨げとなつているものを取り除くことができた」(八六頁)。こうしてカタリナは、ノートルダムの裏手にある広い牧師館を、信仰上の理由で追われてくる亡命者たちの避難所にし、「貧しい者と亡命者の母」となり、また「教会の母」と呼ばれる道を歩み始めたのである。

彼女は幼い二人の子どもを失っている。悲しみを抱えた彼女が向かったのは詩編だった。悲しみの中で神から離れるのではなく、嘆きを通して神に向かう。そこからやがて深い慰めが生じてくる。そして彼女はこの深い慰めを苦しんでいる人に分かち与えようとする。アルムブルスターがハンセン病に罹り、妻や子どもたちからも見放され、孤独の中に置かれた時、彼女だけがしばしば彼を訪れた。彼女は「ミゼレーレ」という詩編五一と一三〇を黙想する慰めの小冊子を書いた。直接には彼のためだったが、孤独に苦

しみ悩むすべての者のためでもあった。手塩にかけて育てた若者ラプスがやがて心ない悪い噂を流して夫妻を攻撃し始めた時、彼女は預言者を叱責するバラムのろばとして「公然と語る」ことを選んだ。歴史は彼女のような無数の人々の存在と情熱によって動いて行った。丹念に資料に当たった上でのマツキーの判断には説得力がある。ただしシヴエックフェルトのキリスト論にはもう少し丁寧な注釈がほしかった(二三二頁一四〜一五行目など)。二四四頁一九行目「秘儀」↓「秘義」、四三〇頁下から三行目「牧師館を確立し」↓「牧師館の一つを設立」。大部の本を読みやすい訳文に移してくださった訳者の方の労に心から感謝したい。

(はが・つとむ 東京神学大学教授、同神学大学元学長)
(菊判・五〇〇頁・本体八〇〇円＋税・一麦出版社)



終末論

〈改革派教義学〉第7巻

牧田吉和
Yoshikazu Makita

Reformed Dogmatics
改革派教義学
7

終末論
牧田吉和

神中心的包括的終末論を問う。
すべての神学的課題は
終末論へと流れ込む。
終末論において
その神学の本質が姿を現す。
改革派神学は神中心的包括的
終末論を問うのである。

A5判・上製・函入
定価【本体4,500+税】円
ISBN978-4-86325-052-9



株式会社 一麦出版社
札幌市南区北ノ沢3丁目4-10
TEL (011) 578-5888
<http://www.ichibaku.co.jp>
携帯 mobile.ichibaku.co.jp

日本人による標準かつ 最高水準の事典

〈評者〉**渡邊義彦**

新キリスト教 組織神学事典

東京神学大学神学会 編
New Dictionary of
SYSTEMATIC
ST THEOLOGY
edited by
Tokyo Union Theological Seminary

教文館

新キリスト教組織神学事典

東京神学大学神学会編

本書旧版を手にしたのは神学校に入学した年で、はじめの組織神学の授業での指定テキストだった。クラス担当は熊澤義宣先生だったが、これを教科書としたのではなく、事典項目それぞれの要点を二〇〇字ずつにまとめて提出する課題のためだった。神学の右も左もわからず学び始めたときの大切な一冊である。

初版から四五年を経て昨年三月、「新」を付して同事典が出版された。執筆者一覧を見ると顔も声も知っている方たちが多い。旧版は多くの執筆者の肉声を知らなかった。肉声を知っているか否かということだけではないであろうが、全体として平易な文章で読みやすくなった印象を持った。多くの項目で参照すべき聖書箇所を挙げて聖書との対話を豊かに展開している。また、参考文献や「さらに学びたい人のために」と挙げている書籍に邦語で手にすること

のできるものが多い。旧版にも組織神学関係の邦語文献目録があったが、新版では旧版以降に出版された文献を多く挙げている。これら文献の充実も半世紀近くの日本の教会、神学の取り組みを少なからず表わしていると思う。

大部な事典では余りしないことかもしれないが、四〇〇頁ほどの本書のような事典では通読が可能で、そのように読むことで執筆者同士、項目毎に響き合う神学の思索、信仰における一貫性を知ることができる。旧版に比して、特に一九、二〇世紀神学の評価がより精確になったこともあるであろう。各項目の呼応関係、一貫性にはそのような時間経過も多いに影響していると思う。

いくつか項目を紹介するならば、「イエス・キリスト」(執筆筆者・芳賀力)の項には、聖書・歴史神学、そして近・現代神学に至る組織神学らしい大胆な概観がある。「父なる

神」(同・神代真砂実)には当然フェニズム神学との対話がある。「フィリオクエ」、「ホモウーシオス」(同・関川泰寛)といった項では旧版以降の研究成果をたどることができる。旧版では取り上げられていなかったり、別項目で触れられた重要な項目(契約、昇天、聖徒の交わり、伝道、福音主義、プロテストантиズム、和解、等)、一項目として挙げられる神学者たち(ジョンサン・エドワーズ、北森熊野、シユライアマハー、ケーラー、トランス、トレルチ、フォーサイス、ヘルマン)、現代的な課題からの項目(エコロジの神学、自然の神学、等)が新たに立てられている。旧版との同項目の読合せも重層的な視野を与えてくれる。

神学を学び始める心得として、森の大きさはかりに目を奪われないよう、また木々の葉一枚だけに見とれ過ぎないようにと友人が教えてくれた。各項目の背後になお大きく広がっている神学の森に分け入る入口と、進むべき確かな道のりの地図を本書は提供してくれる。

序で、編者である近藤勝彦氏は「しかるべき時に再び本事典の全面的な書き換えの時を迎えられるよう期待している」と述べている。神学的営為を担う人々を生み出してゆくことも、わたしたちの教会の責務であることを本書を読み改めて自覚した。

(わたなべ・よしひこ 日本基督教団柿ノ木坂教会牧師)
(四六判・四〇〇頁・本体四二〇〇円+税・教文館)



教文館の本

http://shop-kyobunkwan.com/

好評発売中



世界が絶賛！ 巨匠手塚の遺作アニメ ● 本体28,500円

手塚治虫の旧約聖書物語

豪華9枚組コンプリートDVD BOX + 公式スペシャルガイドブック

天地創造からイエスの誕生まで、壮大な聖書の世界を描いた全26話。世界が絶賛した聖書アニメの最高峰が、手塚治虫生誕90周年を記念して待望の復活！

〒104-0061 東京都中央区銀座4-5-1
TEL 03-3561-5549
呈 / 内容見本、図書目録 ● 価格は税抜

加藤常昭の 全体像が見えてくる

〈評者〉 深田未来生



聞き書き
加藤常昭
説教・伝道・戦後をめぐって

聞き書き
加藤常昭
説教・伝道・戦後をめぐって
平野克己編

味わい深い本を手にした。味の深みは本著の課題である人物自身に秘められているのではなからうか。加藤常昭である。ここで彼に敬称を付けないことにする。無礼かもしれないが編者も「まえがき」の中で「呼び捨て」で自分の「師匠」を語っているのだから私にも許されていいと判断することにした。歴史に確固とした足跡を残した人々を私たちは尊敬の念を込めて敬称を略している場合が多いからである。

加藤常昭にはスケールの大きさがある。加藤の精力的な業績は彼が使命として担ってきた「説教」の領域を超えて広がり、取り組み課題は多く、すべてにおいて優れている。そのスケールを掘り下げて加藤の全体像を少しでも明らかにし、その使命と生きざまと、彼を生かしてきてきたものを共有したいという意図がこの一冊につながる。編者平野克

己牧師と聞き手三人の伝道者たちが加藤と二日間をわたって語り合う機会を生み、その記録が本著である。読み進むにつれこの五人は師弟関係を超えて同志同労の友として心を開いて語り合う生き生きとした光景が見えてくる。これが味わい深いのである。

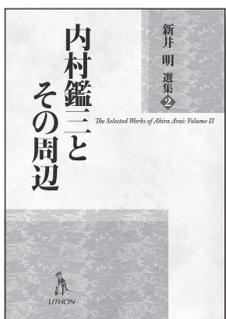
私は加藤を「説教学者」という枠組みに閉じ込めないようにとらえてきた。彼にとってキリストにあつて伝道者として立つことは説教を最大の使命とすることなのであり、その使命を自分の全存在を投入して果たすためにあらゆる学びと鍛錬・訓練をいとわれないとする生き方に学問的探索も重要な要素として位置づけられてきた。そこで説教学者なる肩書がつけられるようになった。彼の姿勢は常にその説教が何を指すものなのかを教会という「現場」で繰り返し明らかにしながら貫こうとする。加藤は教会の主であ

るキリストが自らの内にどう生き、そのキリストに教会を通して養われた人々が世界でどのように生きるかを問い続けてきた。彼の信念や主張をすべての人々が充分理解し、同調してはいないかもしれない。そうであっても加藤の言葉と考えは多くの人々に成長の糧を提供してきた。同時に一定のイメージも定着してきたかもしれない。しかし本著の中で語る加藤は熱情に溢れていながらも、何か肩の力を抜き、いまだに神の言葉を生きたものとして伝える説教を「探求し続けている」謙虚な姿で語る。この姿に読者は親しみと共感を覚えざるを得ないだろう。

私たちは激動の時代に生きてきた。際立った変化の一つはデジタル化やコミュニケーションの分野におけるテクノロジーが私たちの日常生活にもたらした変化である。説教は宗教における心・魂をも含む人間全体の変革や養育を目

指す主として口頭によるメッセージ伝達である。キリスト者はこのメッセージを聖書に見出し、祈りを込めて読み、味わい、考え、今、ここに生きる人間に語り掛け続ける神に導かれて生きようとする。説教の任を担おうとする者はその使命の重さを知りながら自分の限界と取り組まざるを得ない。その真剣な取り組みを喜びとするためにも祈り続ける。この書物を生み出した五人の人々のやり取りは加藤という優れた先導者を中心に激動の時代の中に立つ説教者の姿を共に求め続けてゆく同労者としての苦勞と喜びを雄弁に伝え描いてくれる。そこに希望の味わいが秘められている。そしてまた加藤常昭をより身近に感じ、そして知ることができるのである。

(ふかだ・みきお 同志社大学名誉教授)
(四六判・三〇〇頁・本体三〇〇円＋税・教文館)



新井明選集〔全三巻〕 第二巻 内村鑑三と その周辺

新井 明 著

日本女子大学名誉教授／
今井館教友会前理事長

●A5判上製 402頁
本体5,000円＋税

本巻には、内村鑑三以来の無教会の、ひいては日本におけるキリスト教の、進みゆくべき方向を示し、著者の信仰的視座、世田谷聖書会および経堂聖書会に関わる文書、信仰の先達を偲ぶ文書を取録する。第一部「無教会とその周辺」、第二部「無教会と平信徒」、第三部「辺境のめぐみ」、第四部「世田谷の森で」、第五部「先達の跡を」。

ISBN978-4-86376-071-4

LITHON [リットン]

〒101-0061 千代田区神田三崎町2-9-5-402
☎ 03-3238-7678 ㊟ 03-3238-7638

たこつぼ信仰からの 脱皮のために

〈評者〉寺園喜基



神の国と世界の回復
キリスト教の公共的使命
稲垣久和編

本書の編者、稲垣久和氏は日本における公共哲学プロジェクトに参加し、キリスト教の分野における公共性の問題について精力的に追及している代表的な神学者である。

公共哲学プロジェクトは関西地区にある将来世代国際財団、京都フォーラム、またこれと関連する将来世代総合研究所によって開かれ、研究所の金泰昌所長による公共哲学共同研究会（一九九八年）の開始から本格的に始まった。二〇〇三年からは「公共的良識人」というタイトルの新聞も発行され、二〇一二年に二五三号で終了した。この研究会の成果は東京大学出版会から刊行された『公共哲学』全二〇巻にその一端が示されている。稲垣久和氏はこの公共哲学という考え方をベースにして、「キリスト教の公共的使命」という主題で他の四人の研究者と共同して本書を著した。

本書の問題意識は大きく次のようにとらえられるであろう。

う。普通には「官」と「私」という二項対立が思考枠を形成しているが、その間に「公」もしくは「公共」があり、「官・公・私」の枠組みがあるのでないか。そして教会や宗教を考えると、特にこのトライアングルが必要なのではなからうか。戦前・戦中までは国家神道が「官」の宗教として信教の自由を侵害した。戦後はその反動で宗教は「私」の事柄とされた。だがそれによってキリスト教の信仰もしくは福音も私事の事柄になってしまっていないだろうか。

このような大きな問題意識において、本書はキリスト教信仰のあり方を問うている。すなわち、キリスト教信仰は宗教的真理、永遠の命、魂の救済、個人の心の問題という領域の中に閉じ込められ、私事化されてしまい、聖俗二元論に陥ってしまっており、公共的事柄には関係しない傾向

にある。したがって、このような問題のある傾向から脱皮を試みるのが本書の狙いである。その際、キーワードとして挙げられるのがイエスの説いた「神の国」である。地上に來たりつつある神の国・神の支配は世界を回復する。この大きなテーマを五つの章にわたって展開している。

第一章「新約聖書学における神の国（山口希生）は、リッチュルからシユヴァイツァーまでの一九世紀における「神の国」研究、さらにそれに続く二〇世紀から現在までの研究の歴史を、「神の国」と「終末」との関連で概観している。

第二章「賀川豊彦における神の国と教会」（加山久夫）は、賀川における「神の国」の思想と実践とについて論じている。なお、賀川に対する批判的論述（例えば金丸裕一）にも言及してよかったのではないだろうか。また最後にある「賀川豊彦とバルト神学の支配の下にあると思われるわが国の教会」云々という箇所は唐突の感がある。

第三章「日本キリスト教史におけるキリスト教の公共性——経済人として生きたキリスト者たち」（山口陽一）は、経済活動を通してキリスト教の公共性を明示した人々について、明治初期から昭和前期までにわたって論述している。

第四章「天皇を中心とする日本の『神の国』形成と歴史的体验」（黒住真）は、日本の歴史を通して「神の国」が天皇を中心とした「皇国」として貫いていることを示している。

第五章「『神の国』と公共性の構造転換」（稲垣久和）は、私事化された宗教的真理と公共的事柄との二元論の源流をカント哲学に求め、これを克服する世界の回復としての神の国論を展開する。意欲的な試みである。

本書は、閉塞感のあるたこつぼ信仰と宣教に突破口を与えようとしている。

（てらぞの・よしき＝福岡女学院院長）
（四六判・二五二頁・本体一八〇〇円＋税・教文館）

新聞 アーカイブス 全5巻



1946年の創刊号から昭和の終わりまで。激動の時代を記録した超貴重な一級資料を当時のままデジタル化。フリーワード検索など、検索機能も充実。敗戦直後のキリスト教界がありありと甦る。

時代の先駆を成す紙面、
鈴木範久（立教大学名誉教授）

推薦

戦争が終わって1年も経たない1946年4月、賀川豊彦により『キリスト新聞』が創刊された。特定の教派を超えた本紙の内容は、時代の先駆を成している。記事の中では、とりわけ天皇制と共産主義に対する関心の強さが目をひく。代表的信徒の戦中と戦後の言動の変化をはじめ、現代のキリスト教にとって注意すべき記事があまりにも多い。

価格
100,000円
+税/巻
特設サイト
はこちら
<https://www.kirishin-arch.com/>

キリスト新聞社 since 1946
〒162-0814 東京都新宿区新小川町9-1
TEL. 03-5579-2452
E-Mail. support@kirishin.com

教育の場での福音主義の結実が 窺える優れた論集

〈評者〉 芦名定道



聖書の福音から福音主義へ
佐藤司郎・吉田新編

聖書

福音とは何か

福音とは何か

聖書の福音から福音主義へ

佐藤司郎・吉田 新編

二〇一八年のノーベル賞受賞者となった本庶佑さんは、インタビューにおいて研究には知的好奇心と納得いくまで妥協しない忍耐、そして個人の努力を支える研究チームの存在が大切であると語っている。この研究チームの重要性は、自然科学の研究だけでなく、人文科学の研究にもあてはまることであり、それは、しばしば研究伝統とか研究共同体といった仕方でも表現されるものにほかならない。こうした研究伝統・研究共同体の意義を強く感じさせる論文集が刊行された。それは、東北学院大学（人文学・キリスト教研究）において行われた研究を収録した論集であり、二〇一六年度より東北学院大学が進めている研究プランディング事業「東北における神学・人文学の研究拠点の整備事業」の成果の一端である。東北学院大学に関わる研究者（現役・退職）を中心に——外部よりペーター・ランベ、

辻学、金子晴勇の三氏を加え——優れた専門研究論文が収録されており、充実した研究論集となっている。同じ研究に関わる者として本書の刊行を喜びたい。

本書の詳細は実際に手に取ってご確認いただくことにして、ここでは、概要を紹介したい。本書では、「福音とは何か」という統一テーマが三部に分けて展開されている。福音の内実を扱った第一部（五章から構成される）では、福音書（イエス）からパウロとパウロ以降の諸文書へと、新約聖書内部での福音の動態が描き出され、聖書学の成果に触れることができる。続く第二部（七章から構成される）は、新約聖書の福音がキリスト教史の中で福音主義として形成・展開される過程が辿られる。取り上げられるのは、宗教改革の諸潮流（ルター、カルヴァン、スコットランド）から近現代（シユライアマハー、バルト、エキュメニズム）

へ至る思想史である。そして、第三部（三章からなる）では、福音主義が東北学院において継承され、その教育において実践され、そして芸術（ステンドグラス）として表現されていることが示される。論集全体は、第一部の内容がその結びの第五章（パウロ、オリゲネス、ルター）を扱う）によって第二部へと接続され、また第二部の内容がその結びの第七章（バルト、東北学院）を扱う）によって第三部へと接続されており、統一的な構成となっている。

多くの優れた内容から、特に指摘したいのは、本書から東北学院において福音主義が教育実践の場で結実している

様子がうかがえる点である。たとえば、第三部第二章では、授業において福音が現代思想との対話という形で具体化されていることがわかる。魅力的な授業である。また、第二部第六章では、福音主義がエキュメニカル教育という視点から語られている。いずれも、仙台という地域に長い伝統を持って根つき、東日本大震災後の復興のため研究と教育両面で積極的に働いている大学にふさわしい教育論であり、ぜひ一読をお勧めしたい。

（あしな・さだみち 京都大学大学院文学研究科教授）
（四六判・四六〇頁・本体三六〇〇円＋税・教文館）

古代東地中海世界の宗教事情
を様々な切り口から描き出す



初期キリスト教の宗教的背景

古代ギリシア・ローマの宗教世界
H・J・クラウク 小河陽 監訳 河野克也／前川裕 訳

下巻

キリスト教誕生当時における、周辺世界の宗教・哲学・習俗を詳説。下巻では皇帝崇拜、ギリシア哲学、グノーシス主義について、膨大な史料を用いて考察する。
A5判・368頁・5400円

キリスト教を楽しく学べる入門書



視点を変えて見れば

19歳からのキリスト教 塩谷直也

大学生に福音の真髄を伝えてきた著者ならではの入門書。自由、祈り、贖罪、復活などの基本を、イラストとともに楽しくわかりやすく解説。
四六判・120頁・1296円

日本キリスト教団出版局

〒169-0051 東京都新宿区西早稲田2-3-18

☎03-3204-0422 ☎03-3204-0457

E-mail eigyou@bp.uccj.or.jp 《価格8%税込》

<http://bp-uccj.jp>

書店名	郵便番号	住所	電話	ファックス	URL	メール	郵便振替
北海道キリスト教書店	060-0807	札幌市北区北七条西6丁目	011-737-1721	011-747-5979	http://www.jb-shop.com	sasaki@jb-shop.com	02770-2-56520
善隣館書店	020-0025	盛岡市大沢川原3-2-37	019-654-1216	共用			02350-0-874
仙台キリスト教書店	980-0012	仙台市青葉区1-36 敷島センター・1701F	022-223-2736	共用		fqcwk524@ybb.ne.jp	02230-0-31152
恵泉書房	260-0021	〒新中延町2-2 榎ヶ丘センタービル	043-238-1224	043-247-3072	http://www.keisen.christian.jp	keisen@vesta.ocn.ne.jp	00120-9-43619
教文館	104-0061	東京都中央区銀座4-5-1	03-3561-8448	03-3563-1288	http://www.kyobunkwan.co.jp	xbooks@kyobunkwan.co.jp	00120-2-11357
聖公書店	350-1331	埼玉県狭山市新狭山1-5-1	042-900-2771	042-900-2722		seikoshoten@bible.or.jp	00160-2-18410
アバコ・ブックセンター	169-0051	東京都新宿区西早稲田2-3-18	03-3203-4121	03-3203-4186	http://www.avaco.info	avaco@avaco.info	00130-0-96398
待農堂	167-0053	東京都杉並区西荻南3-16-1	03-3333-5778	共用	http://taisindo-books.jimb.com/	taisindo@icom.home.ne.jp	00110-8-95827
バイブルハウス南青山	107-0062	東京都港区南青山5-10-2	03-6418-5230	03-6418-5231	http://biblehouse.jp	biblehouse@bible.or.jp	00160-2-18410
横浜キリスト教書店	231-0063	横浜市中区花咲町3-96	045-241-3820	045-241-5881	http://www.biglobe.jp/~yohatara.cds/index.html	sksch@mva.biglobe.ne.jp	00250-4-2512
清光書店	951-8114	新潟市営所通一番町313	025-229-0656	共用			00560-8-51419
静岡聖文舎	420-0866	静岡市葵区西草深町20-26	054-260-6644	054-260-5612	http://www.s-seibun.co.jp/	info@s-seibun.co.jp	00810-8-26558
名古屋聖文舎	464-0850	名古屋市千種区今池5-28-4	052-741-2416	052-733-2648	http://nagoya-seibunshala.coccan.jp/	nagoya-seibunshala@nifty.com	00810-5-14073
京都ヨルダン社	602-0854	京都市上京区荒神口通河原町東1-15	075-211-6675	075-211-2834	http://web.kyoto-net.or.jp/people/kjordan/	kjordan@mbox.kyoto-net.or.jp	01010-2-594
大阪キリスト教書店	530-0002	大阪市北区曽根崎新地2-1-15	06-6345-2928	06-6345-2187	http://osakacbs.web.fc2.com/	ochrbook@river.ocn.ne.jp	00990-3-43009
バイブルハウスびぶるすの森	591-8041	堺市北区東雲東町1-1-16	072-257-0909	072-253-6132		sakai-jbs@bible.or.jp	00160-2-18410
神戸キリスト教書店	650-0021	神戸市中央区三宮町3-9-18三陽ビル2F	078-331-7569	共用		kobe-kirisyo@mse.biglobe.ne.jp	01150-7-45120
広島聖文舎	730-0841	広島市中区舟入町12-7	082-208-0022	082-208-0177		hseibun0951@yahoo.co.jp	01360-4-1958
徳島キリスト教書店	770-0052	徳島市中島町3-57-1	088-633-6335	共用	http://www6.ocn.ne.jp/~tcs/	tokushoten@shirt.ocn.ne.jp	01630-5-37119
松山キリスト教書店	790-0804	松山市中一丁目1-23	089-921-5519	089-921-5413	http://www.geocities.jp/masujama_1007/mex.htm	sksch@dokidoki.ne.jp	01650-1-2120
北九州キリスト教ブックセンター	802-0022	北九州小倉北区上雷野5-2-18	093-967-0321	共用		kbookcenter@bible.or.jp	01780-4-39965
新生館	810-0073	福岡市中央区舞鶴2-7-7	092-712-6123	092-781-5484	http://www.sinseikan.jp/	info@sinseikan.jp	01750-5-10932
キリスト教書店ハレルヤ	862-0971	熊本市大江4-20-23	096-372-3503	共用		k-haleruya@bible.or.jp	00160-2-18410
沖縄キリスト教書店	903-0207	中環郡読字嶺777 沖縄キリスト教館内	098-943-7221	共用	http://www.okinawacbs.com/	okinawacbs@yahoo.co.jp	020308-1283

※一般書店関係の方は 日キ販営業部 TEL 03-3260-5670 にご連絡ください。

既刊案内 (2018年12月～2019年1月)(定価はすべて本体価格+税)

編・著・訳者	書名	判型	頁	本体価格	版元	発行日
ビッポリユトス著 大 貴 隆 訳	キリスト教教父著作集19 ーヒッポリユトス 全異端反駁	A 5 函入	582	9,200	教 文 館	12/10
日本キリスト 教 詩 人 会 編	詩 華 集 聖書における背きと回帰	B 6	128	1,600	〃	12/10
朝 岡 勝	教会に生きる喜び ー牧師と信徒のため の教会論入門	四六	224	1,800	〃	12/25
春 名 純 人	キリスト教哲学序論 ー超越的理性批判	A 5	504	6,500	〃	12/25
B.S.チャイルズ著 田中光、宮崎薫 矢田洋子 訳	教会はイザヤ書をい かに解釈してきたか ー七十人訳から現代まで	A 5	506	6,800	日本キリスト 教団出版局	12/20
ペーター・ライ ヘンバッハ 監督	カール・バルト の愛と神学 ー没後50年記念	DVD A6判 ブック レット 24頁 1枚		3,700	新教出版社	12/19
月 本 昭 男	詩篇の思想と信仰VI ー第126篇から第150篇まで	四六	328	3,400	〃	12/25
渡 辺 正 男	老いて聖書に聴く	四六	218	1,500	キリスト新聞社	12/15
葛 生 栄 二 郎	「ロマ書」の人間学	A 5	518	2,700	〃	12/25
小 川 修	小川修パウロ書簡講義録10 ー後期論文集	A 5	446	3,000	リ ト ン	12/17
高井啓介、杉本恒彦編	霊と交流する人びと 下巻 ー宗教史学論叢22	A 5	376	4,000	〃	12/17
広 瀬 恵 一 郎	蛇のようにさとく 鳩のように素直に	四六	136	1,300	ヨ ベ ル	12/1
ナウム・アティーク著 岩 城 聰 訳	サビールの祈り ーパレスチナ解放の神学	四六	266	2,200	教 文 館	1/20
H.J.クラウク著 小 河 陽 監 訳 河野克也、前川 裕訳	初期キリスト教の宗教的背景下巻 ー古代ギリシア・ ローマの宗教世界	A 5	368	5,000	日本キリスト 教団出版局	1/25
塩 谷 直 也	視点を変えて見れば ー19歳からのキリスト教	四六	120	1,200	〃	1/25
宮 平 望	ティズニールランド研究 ー世俗化された 天国への巡礼	A 5	264	1,000	〃	1/31
大 野 恵 正	旧約聖書入門3	小B6	368	1,900	〃	1/31
関西学院大学神学部編	関西学院大学神学部ブックレット11 高 齢 社 会 と 教 会	A 5	102	1,500	キリスト新聞社	1/20
館 正 彦	西郷隆盛とキリスト教信仰	四六	148	1,200	〃	1/21
新 井 明	内村鑑三とその周辺 ー新井 明選集2	A 5	402	5,000	リ ト ン	1/31
長 谷 川 正 明	笑い癒しの神学	四六	448	2,800	ヨ ベ ル	1/25
潮 義 男	創世記講解 上 ー創世記1章～22章	新書	304	1,200	〃	1/25

福音と世界

2019年4月号

特集 人類学とキリスト教

寄稿者 佐藤壯広、前高西一馬、

川橋範子、奥野克巳、管啓次郎

「吾日本・韓国女性神学フォーラム報告 堀江有里」
／新連載 パビロンの路上(上)、Confessions of a Sin of a Preacher Man (マニエール・ヤン)、神の酒 (石井光太)／好評連載 福音書記者たちの饗宴(松本あずさ) 遺跡が語る聖書の世界(長谷川修) わたしはロックがわからない(山口政隆) ほか

A5判・本体 588円・〒70円
定期購読についてはお気軽にご相談下さい。

新教出版社 TEL: 03-3260-6148
Email: sales@shinkyō-pb.com

編集室から

新を図っていく予定です。今回のデザインは、『装丁、あれこれ』（彩流社）の著者でもある、装丁家の桂川潤氏に依頼しました。

本誌の源流は、一九三七年創刊のキリスト教図書雑誌『興文』に遡ります。戦争中に中断しましたが、一九五七年に再刊され、一九七五年、現在の『本のひろば』に解題しました。今日に至るまで、戦前から教えれば八二年、戦後の

予告

本のひろば

2019年5月号

本・批評と紹介

加藤常昭編「いつも喜びをもって」、B・S・チャイルズ著『教会はイザヤ書をいかに解釈してきたか』、R・カイザー著『ヨハネ福音書入門』、片柳弘史著『始まりのことは』、平塚敬一著『老教師の聖書レクチャー』他

お詫びと訂正 本誌二〇一九年三月号三〇頁記載の「近刊情報」教文館刊『すべてのものとの和解』は、日本キリスト教団出版局刊の誤りでした。お詫びして訂正します。

再刊からは六二年になります。丸善出版の『學鏡』（一八九七年創刊）や、岩波書店の『図書』（一九三八年創刊）には及びませんが、読書雑誌として、長年にわたり読書家の支持を得てきました。

再刊された『興文』第一号（一九五七年六月）の巻頭に、チャールス・ラム『書物と読書についての話』を紹介した上で、「今日、書物でない書物が蔓延しているが、真の書物を紹介する使命が『興文』にはある」と謳っています。ずいぶん気負った表現ですが、ストレートな熱意を感じさせます。本誌が読者の皆様にとつて、「真の書物」に出会うきっかけになれば幸いです。（寺田）

VTJ 旧約聖書注解 列王記上 1~11章

山我哲雄



2019年3月25日刊行

◆A5判上製・458頁・5184円
イスラエル三代目の王ソロモンの治世を扱う「列王記上」1~11章を、申命記史書の泰斗である著者が、旧約のみならず文化芸術に触れつつ解き明かす。

コヘレトの言葉を読もう 「生きよ」と呼びかける書

小友 聡



2019年3月20日刊行

◆四六判並製・136頁・1512円
多くの聖書読者を困惑させてきた「コヘレトの言葉」を鮮やかに読み解き、「今の生を徹底して生きよ」という中心主題を明らかにする。「信徒の友」連載の単行本化。

井上洋治著作選集 別巻 井上洋治全詩集 イエスの見た青空が見たい

山根道公 編・解説 若松英輔 解説



2019年3月1日刊行

◆A5判上製・252頁・2700円
神の恋愛テグアヘで満たされたイエスの見た青空が見たい。そんなイエスの道を求めた井上神父の信仰の結実とも言える、「南無アツバ」の祈りの詩集。詩の朗読CD付き。

TOMOセレクト かんたん! たのしい! CSわいわいアイデア集

『教師の友』編集部 編



2019年3月15日刊行

◆B5判並製・96頁・2160円
『教師の友』掲載の活動アイデアを一冊にまとめた傑作選。旧約、新約、教会暦・行事、賛美・祈り、クッキングから、すぐに使えるアイデアを厳選して収録。

イベントのご案内

『マンガ絵本 聖書ものがたり ノアの箱舟』パネル展

『ノアの箱舟』と次回作『クリスマス(仮題)』のラフ画や制作過程を特別公開!

日時 2019年3月19日(火)~4月1日(月)

会場 銀座 教文館 3F ギャラリーステラ

主催/日本キリスト教団出版局、教文館キリスト教書部

会期中イベント 詳細はHPで!

▶3月21日(木・祝) 14時~
ギャラリー・トーク

▶3月30日(土) 14時~(定員12名)
金斗鉦さんによる絵が苦手な大人のためのワークショップ

▶申し込み/教文館キリスト教書部
(TEL.03-3561-8448)

読み取って
簡単アクセス

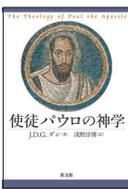


使徒パウロの神学

J・D・G・ダン 浅野淳博訳

21世紀の教会が読み継ぐべきパウロ神学の決定版!

●A5判・960頁・本体6,300円



英国が誇るパウロ研究の世界的権威ジェイムズ・ダン教授の記念碑的著作。「パウロに関する新たな視点」(NPP)の提唱者J・D・G・ダンがパウロのトータル理解、個人の救済とイスラエルの希望との関係、キリスト(へ)のピステイスなどの問題に、独自のバランス感覚で挑む。

『使徒パウロの神学』刊行記念講演会

旧くて新しいパウロの視点伝統・啓示・宣教のタペストリ

講師 浅野淳博氏

日時 3月29日(金) 18時-19時半 教文館9階にて

4月の新刊 (価格表示は税抜)

伝道力の回復のために



贖罪信仰の社会的影響

旧約から現代の法制化へ

贖罪信仰の社会的影響

旧約から現代の法制化へ

青山学院大学総合研究所キリスト教文化研究部編

人権理念の形成と法制化を背後で支えた「罪の償い」への信仰を捉え直す論文集。

●四六判・242頁・本体2,000円

遠藤周作と探偵小説

金承哲

痕跡と追跡の文学

●A5判・362頁・本体3,200円



心の奥底にある暗闇を見つめ、人間の罪やうしろめたさ、弱さを描き出した遠藤周作。「神の神秘」を追求したその文学を探偵小説という新しい切り口から俯瞰する!

命のファイール

ロボット・テロ・不条理・来世と旧約聖書

佐々木哲夫

●A5判・206頁・本体3,000円

ロボット開発は生命創造の模倣か? 死後の生命とは? 旧約聖書を基軸として「命」を多角的に考察。

教文館

〒104-0061 東京都中央区銀座4-5-1 TEL03-3561-5549 (出版部)
本のご注文は (e-shop 教文館)へ! <http://shop-kyobunkwan.com/>

shop教文館

一九五七年七月一日 第三種郵便物認可
二〇一九年四月一日発行(毎月一回一日発行)
本のひろば 第七三六号 二〇一九年四月号

発行所 〒103-8214 東京都新宿区新小川町九-1 一般財団法人キリスト教文書センター
電話03-3336-1651 振替0170-512679
発行人 本村利春 編集人 土肥研一 デザイン 桂川 調 印刷所 榎平河工業社
発売所 日本キリスト教書販売株式会社 電話03-3336-0156

定価七八円(税抜七二円) (¥62円)
一年分二三〇〇円(送料共)